

戦後社会運動史資料論 鈴木茂三郎(4・完)

鈴木 徹三

はじめに

- 1 「ニワトリからアヒル」へ
- 2 国会証言録
- 3 日本社会党創立期(以上, 517号)
- 4 民主人民戦線の提唱と「山川新党」(以上, 522号)
- 5 片山・芦田内閣前後(以上, 531号)
社会党の再建, 第一次分裂, 講和三原則
社会党の再建 講和三原則・労働者同志会 浅草大会, 社会党の再分裂
1952年選挙挿話, 鍋山貞親
片山・芦田内閣時代
片山内閣の成立・共産党との「絶縁声明」
汚職と崩壊 芦田内閣
芦田内閣の成立と崩壊(以上, 本号)

* 故・鈴木徹三氏の遺稿掲載にあたって

531号および本号で, 故・鈴木徹三氏の遺稿を掲載する。鈴木徹三氏は, 2002年6月4日に逝去された。享年79歳であった。同氏のご逝去を悼み, 本誌には, 早川征一郎「鈴木徹三先生のご逝去を悼む」(『大原社会問題研究所雑誌』2002年8月号)を掲載し, 追悼の意を表した。

鈴木徹三氏は, 生前, 「戦後社会運動史資料論 - 鈴木茂三郎(1)(2)」を執筆された。それは, 本誌2001年12月号(517号)および2002年5月号(522号)に掲載されている。とくに(2)の執筆・掲載後, 病状がきわめて悪化するなかでも, なおも続編を執筆されていた。遺稿となったその原稿は, 夫人の鈴木玲子氏, ご子息の鈴木徹太郎氏によりパソコンから発見され, 研究所側に渡された。

編集委員会は遺稿を検討した結果, この遺稿をつぎのように取り扱うこととした。すなわち, 同遺稿については, すでに生前(1)(2)が掲載されており, さらに, その続編が掲載されることによって, 論題についての叙述が完結し, 作品として一層, 意義が増すことを考慮し, これを遺稿(3)(4)として掲載するということであった。

そのうえで, 遺稿掲載にあたって, 編集方針についても確認した。すなわち, 遺稿として, できるだけ原形を保つことを第一義とする。そのため, 遺稿の文意が分かりづらい箇所もあるが, それには解釈を加えた補

社会党の再建，第一次分裂，講和三原則

社会党の再建

芦田内閣が汚職事件で倒れた後の1949（昭和24）年の総選挙では、元首相の片山哲など前・元閣僚も相ついで落選し、社会党はわずか48議席しか獲得できなかった。しかし、この間、産別民同派幹部の入党にはじまる民同派の大量入党、高野ら総同盟系労組員の入党などが行われ、社会党の変質が進んだ。3月に開かれた運動方針小委員会（委員長鈴木）では、稲村順三の階級政党論、森戸辰男の国民党論が論議的になり、階級的大衆政党論という勝間田清一調停案に落ちついた。昭和初期の政治研究会において、鈴木の階級的大衆政党論という妥協案に対して、大衆的階級政党としようとするべきだとの反論が出た。

4月14日の社会党第4回大会において、390票対261票で鈴木は書記長に選ばれた。中執にも落合英一、高野実、沢田広という民同グループが初めて選ばれた。委員長に選ばれた片山は、自らの責任を少しも認めなかった。アメリカあたりで開かれた道徳復興運動の会議に出席するため、2ヶ月間、日本を離れた。従って、鈴木が実権を握り、アジアからアラブ諸国へも書簡を送り、共に手を握ることを誓いあっていた。これらの資料を紹介する時間もないので、興味のある方は大原社会問題研究所を覗いてほしい。

49年11月の総同盟第4回大会においては、高野実が初めて総主事に選ばれ、左派の意気は大いにあがった。12月4日には、右派の曾禰益が条件つきながらも全面講和、中立、軍事基地反対に賛成したので、いわゆる講和3原則が決定され、労働運動その他に大きな影響を与えた。

50年1月16日から社会党第5回が開かれた。14、15日には青年部全国大会が開かれ、青年部に対抗して党右派と労組の右派グループが組織した独立青年同盟に所属する党員の除名を決定した。独青幹部は伊賀定盛らであったが、実際は共産党転向組の鍋山貞親らが組織したものであり、西尾末広もこれに囁んでいた。鍋山については後に述べたい。

独青問題がうまくいかず、大会の主要役員を左派が占めそうな情勢をみて、片山は、大会の民主的運営を求めて大会を放棄し、自分の事務室に引きこもってしまった。水谷が鈴木に語ったように、片山はもっと早く責任をとって委員長を辞任すべきだった。片山は、日本社会党をイギリス労働党のように「幅の広い政党にすべきだ」と述べた。

正を行わず、そのままにした。ただし、人名や固有名詞の明らかな誤記や漢字変換ミス、人名などの表記の不統一について必要最小限の補正を行った。また、遺稿（4）の目次には、番号が付いていないものと番号が付いていても前と連続しないものがあるため、敢えて番号を付けないこととした。

遺稿（3）（4）には、まさに闘病生活の最中の執筆であることが如実にうかがわれる「まえがき」がある。鈴木氏が、重い病のなかでも、この原稿にいかにか心血を注いだかを示すものとして、それらも省略せず、以下に掲載する。（編集部記）

『『そろそろ執筆できなくなりますよ』と担当医師に勧告された。従って、これからは時代を無視して、書きつづけることにしたい。前後関係など、本誌の読者であれば容易に理解しうるだろう。』

1968, 9年, 私はイギリス労働党の招待で約2年間訪英した。一面では社会的差別が厳しいのにもかかわらず, 有色人種などにそれを意識させない巧妙なやり方に感心した。アメリカのような新興国に比べると, さすがに年季が入っている。限られた一般市民としか話せなかったが, 階級対立という言葉はほとんど出てこなかった。代わりに, 雇用者とそれに雇われている者との対立となると, 目の色を変えて議論する者が多かった。

かつて熱心に階級対立やマルクスを論じていた人々の姿はあまりみられなくなった。それに労働党が政権を握っていた時代であり, 自らマルクス主義者だと認める議員はほとんどいなかった。しかし, 「かつて最も影響を受けた人物」の名を問われ, 比較的多くの議員がマルクスと答えたのは意外だった。これが, 西欧社会民主主義なのかと漠然と感じた。68年に労働党の年次大会に招かれた。時の首相ウィルソンの所得政策に対して, マイケル・フットが歴史に残るような激しい糾弾演説を行った。会場にいたすべての代議員は一斉に立ち上がり, 激しく拍手した。ただ一人, つまらなそうな顔をしてパイプの掃除をしていたのは, ウィルソン一人だった。彼は憤慨して席を立たなかっただけでなく, 夜は夫人と仲良く踊り, 機嫌の良い顔でホテルへ戻った。余計な反論はせず, その政策を変えようとしなかった。労働党にとって重要なことは, 社会主義とともに民主主義のルールを守ることにあった。片山が先ず自己の責任を明らかにし, 事態の打開について大衆的に論じる, これが労働党流のやり方である。

すねた子供のように, 片山が居なくなったため, 残された代議員は, 委員長は空席, 書記長に鈴木, 会計に和田を選んで散会した。退場した連中は別に大会を開いた。いわゆる75日分裂ほど訳の分からない分裂はなかった。少なくとも3回にわたる水谷・鈴木会談を含め, 鈴木はその経過を1冊のノートにまとめた。大原社研へ寄贈しておくので, これ以上の説明は省略する。それにしても, 優勢な本部派から鈴木, 和田が身をひくなど, その譲歩によって実現したものである。委員長は空席, 書記長には浅沼が就任した。

講和三原則・労働者同志会

49年12月4日, 社会党は全面講和, 中立堅持, 軍事基地反対の講和3原則を決めた。この3原則の決定は, 日本の平和運動において極めて重要な歴史的決定だった。他方, 49年1月13日, 東京と京都の研究者・知識人55人が集まり「戦争と平和に関する日本の科学者の声明」を岩波の『世界』が発表した。東京側を代表したのは安倍能成氏, 戦術的な中心は大内兵衛らであった。東京は関東をとにかくまとめるということで, 調子をダウンしたが, 京都側は末川博を総帥としてラディカルだった。清水幾太郎が「平家が攻め寄せてきたという感じだね」と丸山真男にささやいた。引き続き, 50年1月に「講和問題についての平和問題懇談会談話録声明」を発表し, 50年12月号には「三たび平和について」を発表した。研究会報告なので, 人によってニュアンスは異なる。

新産別の三戸信人氏は, 丸山真男の増補版『現代政治の思想と行動』のなかで, 「労働運動のなかにも反米, 反ソの社会ファシズムな動きがあります。いわゆる第三勢力のなかに……」(520ページ)と批判され, 『江田三郎 そのロマンと追想』(79年)にまでそのことを指摘した。第三勢力論は新産別の旗印だった。ついでにいえば, 和田博雄派が好んで使う言葉だった。

三戸氏はたえず私に繰り返した。労働運動が平和四原則を確立できたのは, 鈴木茂三郎委員長で

あり、学者グループの力ではないと。私事はさておき、全通など主要労組が学者グループの提案をパンフレットにまとめ、組合員に配付したことは事実であり、その影響力を過小評価してはならないであろう。

社会党の本部派に話を戻そう。本部派が余裕をもって統一に応じたのは、岩波の『世界』という高級雑誌の読者だけではなく、世のなかの空気全体が自分たちに有利に動きつつあること、取り分け総評の結成にみられるように、労働運動の動向に自信を抱いたからである。

1951年1月19日、社会党第7回大会は、委員長に鈴木、書記長に浅沼を選出した。鈴木はたからかに「青年よ！ 銃をとるな」と叫び、「平和四原則」が確定した。

三戸信人氏がほとんど執筆した『新産別の二十年』（70年）によると、平和四原則を中心とする「戦闘的民同」つまり総評第2回大会前後をつうじて台頭してきた民同左派との連携だった。こうした動きは、第2回大会の準備大会からすではじまっていた。国鉄、全通、日教組などの左派中堅幹部は、総評大会で三角同盟（水曜会）を形成しつつあったが、新産別はまずこれらと連携することとし、第1回会合を総評大会の終わった3月、神奈川県藤沢市で開いた。

藤沢には新産別中央執行委員関野忠義（全機金、『湘南よりの出発』労働大学、92年を刊行）が住んでおり、その世話で会合を開いた。参加者は

国鉄 横山利秋、織田
 全通 大出俊ほか1～2名
 日教組 宮之原貞光、坂尾（徳太郎か）
 新産別 細谷松太、落合英一、柏原実、関野忠義

三戸氏によると、その後労働者同志会を組織した国鉄の岩井章はまだ松本におり、この会に参加していない。また、全通の宝樹文彦もまだ山川新党との関係があり、参加しなかった⁽¹¹⁾。

時局は急速に変転した。国労は、51年の新潟大会で大きく左旋回した。その主導権を握ったのは民同左派であり、1月の伊豆長岡の中央委員会で岩井章が本部中闘になり、共闘部長となった。これらの動きに対抗して、右派は9月7日に民主主義労働運動研究会（民労研）を発足させ、総同盟・国鉄・新生民同・全織・海員その他各単産有志が参加した。

これに対抗して、労働者同志会も正式に名乗りをあげ、民労研と公然と対立した。共闘部長になってからは、岩井も日教組の宮之原、平垣美代司、全通の宝樹文彦らと三角同盟の会合に加わっていた。

同志会のメンバーは、『新産別の二十年』、『総評二十年史 上』に譲ろうと思ったが、『総評史』はほとんどこれにふれていない。そもそも何時結成されたかも曖昧である。「本文」では7月につくられたかのように曖昧に書かれており、『下巻』の年表を調べると9月24日となっている。大原社会問題研究所の『大年表』もこれを引用した。

しかし、年表をひくまでもなく、『新産別』には、その「趣意書」や代表メンバー、世話人名が

(11) 三戸信人氏に確認することを忘れたが、同じ書物『新産別の二十年』の年表には、「1951年1・29 戦闘的民間連絡会議（藤沢）（日教組・国鉄・全通・新産別）労働者同志会のはじまり（『平和四原則』を中心に）」と書かれている。何れの日の方が正しいのであろうか。

紹介されている。

また、岩井章『ひとすじの道50年』（89.7、国際労働運動研究会）には、そのフル・メンバー、綱領などが紹介されている。時間の関係で紹介できない。両者に共通している綱領は、（1）階級的立場に立ち、生活と権利を守るため反動攻勢と闘う（2）平和四原則を堅持し、自由と独立を守り、世界平和の為に闘う（3）国際自由労連に対し自立的立場を堅持しつつ、世界の労働階級の団結の発展を期す（4）左右の全体主義を排除して民主主義を守る（5）あらゆる障害を克服して闘う労働戦線の統一のため努力する。

岩井氏によれば、新産別の三戸信人、柏原実がメンバーだった。三戸信人氏の話によれば、総評の高野実と新産別の細谷松太は、一時総評の結成をめぐる対立したので、二人とも遠慮した。しかし、同志会の結成にはともに賛成であり、協力してもらった、とのことである。

浅草大会、社会党の再分裂

1951（昭和26）年10月、社会党は、講和に対する態度をいよいよ決定しなければならなくなった。左派の講和・安保両条約反対に対し、右派・中間派は講和条約賛成、安保条約反対論を主張した。鈴木は一応委員長としての立場をとろうとしたが、何時もならばマアママ居士の浅沼書記長が前面に飛び出したからである。大会を開けば両者ともに十数票の差でどちらが勝つか分からないといわれた。

3、4日と中央執行委員会が続けられ、分裂をさけたい一部の中間派を鈴木はしたが失敗。16票対14票で（鈴木委員長は棄権）右派案が通った。鈴木はあくまでも党の統一を守るという立場を捨てなかった。

22日には中央委員会が開かれた。右派はあくまでも中執委を押し通す方針を決めた。これに対して、労働者同志会、党青年部、高野・細谷は左派に重大決意を促す申し合わせを行った。

この大会に関する鈴木「ノート」が一冊残されていたが、いま手元がないので利用できない。「ノート」の最後は確か「変心」とペンで書き入れ、後に鉛筆で「党を守る」とつけ加えていたと記憶している。

「党は割らない。あらゆる妨害は排除する。流会させない。最終的には大会で決定する」など、大会の進行具合などまだ分からない段階に書いたものだろう。一部の新聞報道に報じられたように、もし中執委原案が通った場合に委員長を辞める決心は当然できていた筈である。

浅草大会で左社右社と両派に再び分裂した。公会堂の2階の傍聴席で私も徹夜した。鈴木らが何か発言しようとする、鍋山の組織した独立行動青年隊約30名ほどが、指にメリケンサックかなにか巻いて、一団となって壇上めがけて突進し、議事の進行をとめた。近くにいた地元のヤクザ風の男達は「スゲエ所だな、社会党という奴は、俺たち顔まけだぜ」と舌を巻いていた。鉄格子があり、そこから出られない筈の浅沼が、火事場の底力というか、鉄格子を曲げて巨体を表し、鈴木に迫った光景は覚えている。すぐ、左派の連中と伝法院へ引き上げたので、詳しい舞台裏は知らない。

あれが本物の右翼運動であり、単なるヤクザとは異なることを初めて知った。背後にいる鍋山という人間も分かった。

1952年選挙挿話、鍋山貞親

西尾は右社の河上委員長を認める代わりに、自分の復党を求めた。鍋山をパイプとして、佐野学その他の転向組も社会党いりを狙った。鍋山はまだ候補者の決まっていない東京第3区（鈴木選挙区）から立候補しようとした。支部が握りつぶしたと聞いているが、右社は三輪寿壯を公認した。結果は鈴木6.9万、広川弘禅5.4万、三輪5.4万の順であり、鍋山は2.2万にすぎなかった。この時の「鍋山貞親後援会趣意書」に名を連ねたのは、有田八郎、大蔵公望、菊川忠雄、佐野学、重枝琢己、滝田実、西尾末広、星加要、松岡駒吉、三輪寿壯、安岡正篤、矢部貞治、矢次一夫、山名義鶴、湯沢三千男らであった。無断借用もあるかもしれないが、おおよその陣容を知りえよう。

いうまでもなく、委員長は全国を飛びまわり、投票日直前にやっと自分の選挙区に戻るだけである。鈴木演説を聞いたこともない政治評論家のなかには、鈴木には貴族的なところがあり、1日に限られた回数しか演説しないと批判する者もいる。1人が2人ならばともかく、意外にその数は少なくない。もっと勉強してほしいものである。

例えば、『毎日新聞』は「たいてい一時間から二時間近い『大演説』で、二、三十分でサワリだけ聞かすという器用さはない。街頭演説でも最低四、五十分かかる」と報じた。世田谷の夜の演説会にはよくつき合ったが、同じ人が聞きにくると、できるだけ話を変えようとして、シドロモドロになってしまう。講談や歌舞伎と同じく、ファンは例の名調子を聞きたくて来るんだと注意しても、分かっているんだがどうしてもそうになってしまうと弁解していた。

これまた意外な話だが、浅沼稻次郎氏は学生時代、演説がまずいという定評だった。ところが、5分が10分ほど叫び、サッと消える名演説家となった。氏の持論は、同じ演説でも1万回やればうまくなる、ということだった。

なお、鈴木が不在のため、当面の相手である三輪さんが、どのような演説をするのか、聞きに行った。予想どおり、左社の平和四原則や政策が、いかに非現実的なものか先ず批判し、ついで右社の政策を説くという常套的なものだった。しばらく経ってからまた聴きに出かけた。左社の非現実性だけを説くのでは、広川にかなわない。といって鈴木の悪口を言いつづけても票に結びつかない。平和四原則でなければ3区では票を取れない。そこは老練な政治家、今度は鈴木とほとんど区別のつかない内容に転換した。これでなければ政治家になれないと、慣れない私は驚嘆した覚えがある。

なお、この選挙で左社は54名を当選させた。推薦候補ですぐ入党した4名を加えれば58名、ほぼ右社に匹敵する議席を獲得した。新聞は「三十、四十代の若手が大半を占む」と評し、43名と戦前派が圧倒的な右社と対比させた。

片山・芦田内閣時代

片山内閣の成立・共産党との「絶縁声明」

1947（昭和22）年2月7日、2・1スト中止直後、マッカーサーは総選挙を行うよう指示した。4月20日、新憲法下初の参議院選挙、同25日に衆議院総選挙を迎えた。これに備えて保守陣営では、協同民主党と国民党が合同して3月8日に国民協同党を結成した（三木武夫書記長）。進歩党と自

由党を脱退した芦田均を中心として日本民主党が発足した（芦田総裁，幣原最高総裁）。ここでは、選挙前における社会党左派の動向を社会主義政治経済研究所の資料に基づいて明らかにしたい、と思う。

前年末の12月19日、内閣倒閣実行委員会が組織された。『社会主義政経通信』第19号（47.3.22）によると、社共などを中心とする共同戦線的組織である。しかし、スト前まで社会党の主流は打倒どころか、連立工作に忙しかった。総選挙に際して、共産党は社会党に選挙協力を申しこんだが、拒否を予想した戦術的なものにすぎない。3月6日、左派の反対を押し切って社会党は拒否した。これより先、総同盟は社会党単独支持をすでに決めていた。しかし、研究所では選挙に備えた実行委員会がしばしば開かれ、様々な人々が忙しく出入りした。3月14日までに産別の聴濤ら9名、総同盟原虎一ら8名を初め日農，民科，新日本文学会など52名が委員会に立候補を申し入れた。だが、社共両党の肩書で申しこんだ者は一人もおらず、共同戦線は実らなかった。もともと同委員会は、2・1ストのために加藤勤十らが中心となり、総同盟，産別，日農その他の組合を中心として結成したものであり、社共両党の正式機関ではなかった。この打ち合わせ会にも、名の知れた共産党員は参加しなかった（広沢氏談，99年1月）。

共産党に対する当時の社会党左派の態度は、研究所機関紙第21号（4.5）により知りうる。一方では、共産党との共闘の必要性を唱え、他方では、社共は本質的に相容れないことを強調する矛盾したものであった。両党の相違点として、社会党は民主主義革命の過程で漸次社会主義政策を実施して拡大していこうとするが、共産党は当面の目的を民主主義の徹底とみており、「資本主義か社会主義か」のスローガンに批判的である。また、革命政権について、社会党は勤労大衆を基盤とする民主的政府としているが、共産党は当面の革命をブルジョア民主主義と規定し、いわゆるソヴェート権力を基礎とする共和政府を考えているとの疑いがある。また、共産党はしきりに「祖国」という言葉を最近使いだし「我々こそ真の愛国者」であると高唱しているが、社会党は戦争と敗戦による国民の苦悩、憤怒に身を焼かれた国民の立場をとっていると批判した。しかし、仮に共産党が信義、友愛、協同の精神が欠けているとしても、日本の民主主義革命のために共産党との協力は必要であると強調した。左派内部の様々な見解を反映するとともに、共産党に失望した浮動票を狙ったものであろう。

いざ選挙となると、社共両党は相競合する階層に期待をかけ、共闘などはすっ飛んでしまう。機関紙（4.12）によると、倒閣委員会は、参議院に松本治一郎，木村禧八郎ら5名，衆議院に新妻イトら148名を推薦した。殆どは社会党もしくは社会党系無所属で、共産党員の名は見当たらない。これらの人は「主として社会主義政治経済研究所の関係者」と断っているが、なかには右派に属したり、後に首相になった鈴木善幸の名もある。官僚や地方のボスのなかには、社会党の将来に期待し様子をみている者は少なくなかった。

選挙の結果、社会党は143名を獲得し、自由党131，民主党120を抑えて第一党となった。参議院でも47名と第一党に躍進した。徳田が50人以上当選と豪語した共産党は衆議院で5議席に減少し、参議院も4議席しか獲得できなかった。社会党の当選者中、衆議院では左派は50名を突破し、鈴木，加藤，稲村，荒畑，島田，黒田，辻井，山花秀雄らが当選し、参議院には、松本，木村，岡田ら研究所関係者を送りこんだ。ただ、研究所を任された伊藤好道は、選挙運動があまり出来ずに落選し

た。

社会党第一党の報を聴き、西尾は「そりゃ、えらいこっちゃ」と口ばしってしまった。平林たい子は、鈴木もまずいと蒼い顔をしたという噂を聞いた。党本部の空気を加藤宣幸氏に尋ねると、勝利の喜びにわくというよりは啞然とした空気の方が強かった（同氏談、99年6月）。まさか第一党になるとは誰も予想していなかったようである。

西尾は連立構想と同様に吉田を首相とする4党内閣を考えた、と回顧した。加藤や鈴木は最初に社会党単独内閣論を唱え、加藤がGHQのケーディスに説明しても、すぐ解散して過半数を取る自信はあるかと反論された（『現代史を創る人びと 3』71年、毎日新聞、254、255ページ）。労働組合は自由党を除く社、民、国協三党連立を主張し、激しい論議の結果、左派も火中の栗を拾う三党連立やむなしと決した。若手の研究者からは、社会党が野党にまわれればよかったのではないかという質問をよく受ける。結果論として確かにその通りである。政治の裏を知らなかった私なども、単純にただ喜んでいただけである。しかし、一般大衆は社会党内閣になれば生活がよくなるのではないかと、と過大な期待をかけ、マスコミも好意的であった。「社会党中心内閣」というスローガンを掲げて選挙戦を闘ったので、政治家として労組や大衆の期待を裏切るのは難しかった。吉田内閣で苦労した稲葉秀三、都留重人、後に和田博雄らも片山に困難な情勢を説明し、引き受けないように説得した。だが、当の片山は開票直後の記者会見で「当然、第一党たる社会党中心」といち早く発言してしまった。

鈴木が懸念したのは、占領下、まして保守党との連立政権では、社会党の政策が行いえないことである。また、それまでに共産党との関係を明確にしておくべきだった、と後悔したようである。

もともと鈴木は当時の共産党に批判的だった。まだ京大の学生だった私は、46年7月2日付の書簡を受け取っている。

「このほどから、安定本部の長官の問題で有沢君と度々会った。断ることを協議したわけだ。有沢君に、君の、このあいだの手紙のことについて話をしたら 共青に入ってくれといわれて考えているということ そこを、頑張らなくては、としきりにいっていた。これは、私も同感だ。

一、共産党とその原理たる共産主義、つまりマルクス・レーニン主義は、マルクス・カウツキー主義とともに、世界的に批判されつつあり、マルクス主義に還れ もう一度マルクス主義にかえって、そこから客観状況に適應した運動方法をたてること といわれている今日、学生は、あくまでも、原理の探究に進むべきであろう。

二、とりわけ日本の共産党は、一応、発展の限界にある これは社会党の今後の動向と関連することではあるが それは、ともかくとするも、現在の（1）徳田君即ち代々木天皇の独裁制が打破されなくてはならぬ、（2）あの『愛されない』戦術が、清算されなくてはならぬ、（3）ソビエトとの関連 これが最も重大で、アメリカ治下における運動としては、ソのいずれからでも、できるだけ、中立でなければならぬ。そうでないと、日本の将来に、不幸と不利を招くことがあろうかとおもう。以上は私見のみ」。

この書簡により、鈴木が共産党をいかにみていたか、明らかであろう。また、社会党創立前に唱えた「米ソ両国からの中立」を強く意識し、「マルクスに還れ」という口癖の裏にひそむ柔軟な思考方法を知ることができよう。

総選挙後においても、共産党に対する鈴木の評価は変わっていない。だが、議員をも含めて社会党内に共産党員が少なからず入りこんでおり、GHQや保守党にその点をつかれる恐れがあった。いわゆる構造改革をめぐる共産党を除名された法大の今井則義氏は、本部や青年部所属党員の名前を私に教えてくれた。議員レベルは最高幹部クラスしか知らないそうなので、志賀義雄氏に会って確かめたいと思っているうちに亡くなられた。

67年12月、鈴木は労働大学で社会主義運動の歴史について講義した。「いまだからいえるのですけれども、社会党の中央執行委員会のなかに共産党のフラクションがあった。」「加藤勤十君と黒田君」が野坂、伊藤律と絶えず会合し、共産党が決めた方針をのんでくる。何とかしなければと自分もフラクションに入った。しかし、2・1スト前には、共産党の青年行動隊十数人が身辺保護と称して取りかこみ、スト反対の人との接触を妨げられるなど、思うようにできなかった（『日本社会主義運動史話』、『鈴木茂三郎選集3』労働大学、70年、28ページ～）。労大学長として、鈴木は気楽に話しており、誤解を招きやすい言葉を使った。講義のテープをおこしたものを労大から頂き、『選集』に収録することになり、木原実さんに編集をお頼みした。氏はノー・カットで公表された。それでも前後をよく読めば「本人はフラクションだとは考えていない」などと述べており、共産党に利用されていたにすぎないことは自明である。しかも、加藤さんは二・一ストの時「ぼくと鈴木君、共産党から野坂君と徳田君と四人で、秘密のアジトと言いますか、市政会館のいちばん上」の狭い部屋を連絡場所にした、と回顧されている（前掲書253ページ）。徳田の側近伊藤律は、その正否を今確かめようはないが、「野坂と二人で、松本治一郎、鈴木、加藤、労農党分立後は黒田、岡田春夫、鈴木清一、堀真琴ら」と秘密会合をもった、という「極秘メモ」を残した（伊藤律「三重スパイ 野坂参三」、『文藝春秋』94年6月号）。専門家の方から「鈴木さんも入党したのですか」と尋ねられたこともある。

それが契機となって、戦前におけるスパイ、戦後における社会党の秘密党員は誰か、京大の渡部徹教授とよく話題にした。高野が共産党に入・脱党を繰り返したことは、本人も認めている。共産党の機関紙に「高野」と呼びすてた時は脱党、「高野氏」とあれば入党時と教えていただいた。また、渡部説によると、いわゆる社共大合同に応じて共産党へ入った人々は党員である。また、黒田党員説を主張したので、氏は労農党結成後に共産党を罵倒したと反論した。加藤党員説はシズエ夫人の存在からみてもありえない。長男の宣幸君は「あくまでも本質的には日労系だった」と説明した。確か島上善五郎さんだったと記憶しているが「戦前、中間派の加藤さんが何故共産党に近い線まで走ったか」と尋ねると、「あの人は、なにがなんでもお山の大將でないとおさまらない人だから」と説明され、納得したことがある。これ以上詳しい分析は遠慮させていただきたい。

果せるかな、47年5月8日付『ニッポン・タイムス』にラッセル・ブラインズA P通信東京支局長は、社会党を分析して「若干の左翼は共産主義者と密接に協力することを公言している」と述べた。これに対して、研究所の布施 禰一が執筆した「社会党左派の立場」と題した原稿が残っている。布施声明の要旨は「明らかに事実と反する。日本で初めて民主政府が誕生せんとしている時、封建的勢力の陰謀的意図に利用される危険すら感じられる。左派の人々は、欧米では考えられない頑強な封建的勢力を打倒するために、昨年夏までは共産党との提携を主張した。だが、昨秋いらい世界及び国内情勢の認識について対立し、日本経済の破局と打開方策について、その誤りを指摘し

てきた。経済復興会議の成立を指導し、2・1ストは、政府の無理解と共産党幹部の誤りにより複雑になったが、その政治的性格に反対し、円満な解決に努力したことは、司令部関係者も知っている。

従来から共産党とは明確な一線を劃してきたが、今回の選挙にあたって共産党は社会党左派を攻撃し、後に野坂と徳田とは全く異なる意見を述べた。議会勢力として共産党に配慮する必要はなくなり、独自の見解で民主革命を建設的に推進する決意でいる。選挙中に保守政党が『社会党左派は共産党の手先』と悪宣伝したにもかかわらず、共産党とは異なると理解され、左派は躍進した。

社会党左派は建設的の民主的の社会主義者であり、露骨な利益擁護を目的とする封建的勢力の最強の批判者である。日本の現実、アメリカの常識では理解しがたい特質をもつ。建設的の社会主義以外に救われないほど深刻である。このような社会主義は全く左派の頭脳によるものである。

社会党には左右両派が在る。反資本主義的の見地に立つあらゆる分子を結集した共同戦線党だからである。しかし、日本における唯一の民主主義的の政党であり、激しい論議はしても、民主的の論議の結果到達した方針は厳守して今日に至っている。

この布施声明は、専ら外人記者団向けに書かれたもので、国内に出さない条件だった。その後の経過は分からないが、森正蔵『戦後風雲録』（鱗書房、55年）の解説が事実に近いように思われる。森説の要旨は「加藤シヅエ夫人は、英語はお手のものでアメリカ人に顔が広い。夫君を大臣にした一一心、国際的の反共の空気が彼女をゆすぶる。入手する悪情報は直ちに夫君に伝える。加藤は鈴木と相談し、共産党が弾圧されても左派に波及せず、保守派が左派の存在を理由に片山内閣の組閣を妨害しない為に、外国だけに発表されるならば、もっと明確に共産党との絶縁を宣言するにしかず、との結論に達した。鈴木が無産運動の歴史から説きおこし、共産党の暴力革命に反対し、その誤謬と過失をつき、共産党と『明確な一線を画する』との歴史的の声明を作成し、14日夜、外人記者団との会見に臨んだ。この日の正午頃、布施名義の英文声明が外国通信社にくばられた。記者団との会見は、シヅエ女史の通訳で反共的印象がさらに強められた。布施声明は無視され、その内容は海外へ打電され、電波は世界を一周し、16日に日本の新聞に掲載された。驚いたのは当の鈴木、加藤の二人だった。AP通信は、左派が入閣できるように発表したと思われる、との注釈までつけた。この発表まで、西尾は鈴木に運輸相を約束し、鈴木は左派から2名入閣を要求していたが、『左派屈服せり』と入閣交渉を打ち切った。

布施声明だけで止めておけばよかった。それが加藤夫人の怪情報に乗せられ、英会話はさっぱり分からない二人は、夫人が何を喋っているのか理解できなかった。長年記者生活をおくった鈴木が、外国の新聞だけならばよかろうと思ったとは信じがたい。おそらく鈴木は、労大講義のとおり、「フラクションを追いだす」ために、共産党との関係を絶つことを明らかにする必要を感じたのであろう。だが、如何にも時期が悪かった。その内容は如何にも弁解じみており、もっと簡明に述べるべきだった、と思う。「物欲しげ」と批判されても仕方がなかった。加藤宣幸君も認めているように、別に声明を出さなくても「大臣」この天皇制的の肩書を未だに用いているのは何故だろうか

になれた筈である。もっとも、鈴木運輸相云々は誰方からも聴いたことはなく、単なる観測気球であろう。いずれにせよ、この声明はシヅエさんにとって逆効果であり、左派内部に動揺を与え、自由党のみならず、党内の西尾や平野らが左派を締め出す口実を与えた。既に述べたように、木原

さんらが「鈴木さんほど戦略、戦術にうるさい人はいなかった。また、あれほどその実践がまずかった人もいなかった」と評したが、この「絶縁声明」もその一例である。

片山内閣の成立は難航した。先ず片山が動いて吉田首相に協力を求め、5月9日に四党代表者会談を実現させ、16日に四党政策協定案が決まった。連立構想の経過からみて、西尾らにとって、自由党を交えた四党連立は当然だった。社会党の提案した政策は「マッカーサー書簡」を拠り所としたものであり、「書簡」の草案は都留重人が執筆したものである。既に記したように、この際共産党との関係を絶つことを内外、ことに党内外に明らかにしたかったのであろう。しかし、片山内閣成立前という時期が悪く、

汚職と崩壊 芦田内閣

芦田内閣の成立と崩壊

片山が内閣総辞職を発表してから、芦田内閣指名までかなりの月日を要した。憲政の常道からすれば、野党第一党の自由党にいくべきだが、社、民両党は「与党内の事情によって行き詰まったもので、政策的に破綻したものではないから、政権を担当する資格がある」と自由党の要求を拒否した。民政局はもともと反動的な吉田内閣に反対であった。社会党左派も加藤、野溝が入閣し、実力者の安平らが離れたことは大きな打撃だった。この騒動で研究所の機関紙も休刊し、残念ながら資料として利用できない。荒畑、勝間田らが下野論を強く主張したことは知っていたが、改めて調べてみた。左派の主だったメンバーは、虎の門のうなぎ屋の二階に集まり協議した。その結果、左派全体としても完全野党論の立場をとり、早期総選挙の実施を要求する、ただし党内で孤立しないように留意することで意見の一致をみた、と聞いた（広沢氏談、99年7月）。鈴木は、一旦野に下がって社会主義政党としての主体性を確立し、総選挙に望むべきであると主張した。

2月21日の中執で左派は片山の再選を主張したが、右派の芦田説に敗れた。三党政策協定委員に浅沼、鈴木、水谷が選ばれたが、社会党の意見はほとんど無視された。3月末の官公労ゼネストはGHQの覚書によって禁止され、全通の地域闘争も禁止された。片山内閣時代に比べ、冷戦を反映して、GHQの姿勢は強硬になった。7月22日には「マッカーサー書簡」により、公務員の団交権、スト権は奪われた。研究所でただ一人加藤労相の実現を歓迎した大橋は、一転して加藤を罵倒するに至った。

いささか先走ったが、芦田内閣の成立をめぐる、あやしげな風説が乱れ飛んだ。

森の前掲『戦後風雲録』は、「下野を主張する左派の首領某と自由党の首領の二人（特に名を秘す）」が秘かに熱海で会談し、左派六〇数票を一致して吉田に投ずる密約を結んだ。投票直前、芦田のすさまじい実弾射撃によって半数は崩され、三〇票は芦田に流れたと、いかにもまことしやかに左派に大金が流れたように記した。「特に名を秘す」と思わせぶりである。他の名前をあげるのは名誉棄損の恐れがあり、例えば鈴木としよう。大学卒業寸前で金に困っている私を、子煩悩な鈴木が放っておく筈はない。他の首領についても、当時の本部書記諸氏に確かめたところ、左派の人々は清貧を誇りとし、金によって動く者はいなかったと怒られた。仮にそういう動きがあれば、本部書記や労組などに分からない筈はなく、政治的生命を失うことは必至である。そんな本を読む

など忠告された。

梁田浩祺の『日本社会党』に至っては、黒田らは「加藤勤十が労相になるとき、鈴木茂三郎、加藤勤十の二人が財界人とも話合ったうえで、『左派に対する大衆の人氣が落ちることも考えられるから、一人は閣外にいることにしよう』と相談して加藤労相が実現した、という情報を信じていました」と書き、それ以上解説しなかった。読者に当然そういう事実があったと思わせる方法である。書記連は、加藤の入閣に反対し、シヅエさんから借りていた家から鈴木が追い出されたことなど、社会党の実情をよく知っていたのに何故そういう書き方をしたのかな、と不思議がっていた。「和田びいきだからではないですか」と尋ねると、あの頃は鈴木と和田は非常に親しく、「先生、先生」と和田が呼んでいた時だと否定された⁽¹²⁾。

芦田指名をめぐって、新聞は、乱れとんだ札束は2億円と報じた。自由党は民主党に保守結集をよびかけ、民主党が拒否すると同志クラブなどと合同し民主自由党（民自党）を結成し、第一党となった。民主、国協から脱退者が続くなど混乱し、おそらくそれをめぐって大金が飛んだのだろう。発足当初からこの内閣は腐敗にまみれ、GHQをまきこんだ昭和電工問題で崩壊したことになる。

芦田内閣になってから占領政策は冷戦を反映して明白に転換した。内閣に対するGHQの姿勢も硬化した。しかし、民政局は、依然として吉田らの動きは保守反動の徒と非難した。ストライク報告書、ドレーパー使節団の来日など、外資導入により日本経済を再建しようとする芦田連立内閣を支援した。

国家主導による経済の急成長は、汚職と結びつきやすかった。まず、槍玉にあがったのは西尾副総理である。不当財産取引調査特別委員会は、6月1日、西尾の土建業者からの献金をとりあげ、委員会に喚問した。西尾は「党の書記長である西尾個人」に対する献金と釈明した。検事総長は西尾の起訴を首相に求めた。6月10日、左派は西尾問題に関する肅党声明を発表し、西尾を統制委員会に付することなどを要求した。同24日、自由党など野党は西尾不信任案を上程した。黒田らは賛成すべきだと主張したが、片山委員長は責任をもって処理すると確約し、鈴木らは片山が早急に辞任させると信じて反対の立場をとった。7月6日、西尾は辞任した。7日、東京地検は西尾を起訴した。しかし、左派内部の亀裂は西尾問題をめぐってさらに深まった。

他方、早くから昭和電工事件が取りざたされていた。6月に日野原社長が検挙され、9月には大蔵省の福田赳夫、火つけ役だった筈の民自党総務の大野が逮捕され、つづいて栗栖安本長官、10月6日には西尾副総理がまた拘置所に収容された。芦田内閣の命運はつき、僅か7ヶ月で崩壊した。

西尾に対する容疑の重要ポイントの一つは、稲村がこれ以上昭和電工問題を追及しないように依頼したことにあった。正直な稲村はそんなことは全くなかった、とすぐ鈴木に報告した。他の情報なども考慮して、これは無罪になると鈴木は予測した。『西尾末広の政治覚書』にも、日野原社長と一度会っただけで、藤井常務から稲村を説得してくれと頼まれたが、左派の急先鋒にそんなことを言えば逆効果だ、と断った。また、電工事件で社会党に働きかけるならば和田の線がある。「和田君は、四月選挙のときも日野原から十萬円の献金を受けているし、和田夫妻、日野原夫妻、丸山夫妻（安田銀行常務）は選挙後、丸山の家で食事などにもしている間柄である。安本長官という

(12) 梁田浩祺『前掲書』67ページ。

職務権限上、和田に相談して頼む手があった」と回顧した。「勝間田の線もある」と弱くて可能性のない線まで指摘した。西尾は敵と目した人物についてよく調べているな、さすがは権謀術策家と妙に感心させられた⁽¹³⁾。

電工事件は、日野原節三が強引に同社の社長になり、復興金融公庫から巨額の融資を受けており、それに政治家、官僚などが協力した事件である。今日では広く知られているように、その裏には、G2（参謀第二部）がGS民政局、とくにケーディス次長を陥れる策謀であった。日野原が面倒をみていた秀駒の店に鳥尾元子爵夫人が出入りし、ケーディスと親しくなった。金銭の授受があった事実をG2（情報局）は調べあげていた。ケーディスは帰国させられ、1年後、失意した彼を慰めるために鳥尾夫人が訪米して彼を困らせたなど、裏話をすればきりが無い。

しかし、芦田内閣の崩壊を前にして、民政局はなお吉田内閣の成立を阻止しようとした。かつて自由党を脱党しようとした山崎猛首班内閣の実現工作に乗り出した。吉田に明日はないとみた星島二郎、山口喜久一郎ら民自党幹部もこれに同調した。ホイットニー局長は鈴木を呼び出し、大蔵大臣兼安本長官（鈴木は大蔵大臣と回顧）になるよう説得した。

それは民主主義にもとると鈴木は断った。吉田内閣ができてよいのかと執拗に迫られたが拒否しつづけた。他方、山崎首班論が大勢をしめるようになり、民自党もあわてた。山崎に議員を辞職させるというウルトラ手法により、この工作をぶちこわした。

山崎工作の失敗後、日本政府に対する民政局の権威は失墜し、G2（情報局）がこれにとって代わった。すでに、多くのニュー・ディール派（特に左派）は、失望したり、本国に職を求めて日本を離れたが、さらに帰国させられる者が増加した。

この間、マーカットは7月に経済安定十原則を内示し、芦田に実施するように要求した。閣議で一応決定したが、それを実行する能力を欠き、内閣をおびやかす対策の收拾に追われていた。

しかも、折り悪しく、西尾の献金問題のさなかに、23年度予算案（4～6月は暫定予算）が問題となった。予算委員長には、西尾らの反対を押し切り、珍しく片山委員長が強硬に鈴木を推して決定した。鈴木はまた苦渋な道を歩かされるに至った。

『日本社会党の三十年』は、社会党に除名された労農党の資料や離党した荒畑寒村の著書により、その経過を説明した。準党史とはいえ、社会党政調会編『昭和二十三年度予算案と我党の修正経過』を用いるべきだった。その内容については、拙著『片山内閣と鈴木茂三郎』で紹介しておいた。片山内閣時代の『都留日誌』のように信頼すべき資料はないが、政調会資料、復刊した研究所の機関紙、『渡辺武日記』により、予算問題を検討したい。

研究所の機関紙は長期間休刊し、23年5月より『政経通信』と改題して復刊した。しかし、山川均が主幹となり、研究所本来の性格が失われた。予算問題については木村禧八郎が執筆し、これが左派の見解と思われると山川は述べた。「山川・鈴木責任編集」とうたった第46号（6・21）では、「キャラコ事件、軍服払い下げ事件で最も大きな打撃を受けた民自党は、必死になって西尾への献金、復興金融問題を探しだしてきた。民主党は、西尾問題をあまり追及すると民自党のみならず自党の大物を傷つけることを恐れ、とにかく西尾問題で社会党を牽制し予算案を通そうという下心を

(13) 西尾『前掲書』274～285ページ。

いただいている。その方向で民自に働きかけ、苫米地・大野会談が開かれた。また、社会党右派も民主党につけこまれ、自党の政調会案の骨抜きをはかっている。これに対して、左派は、西尾と予算を切り離し、西尾問題を発展させてあらゆる政党の醜悪な面を一掃すべく猛運動している」（要約、無署名）と報じた。

同号で「社・民連携の限界線」を山川が執筆し「予算を成立させるだけの役割を演じているならば『社会主義政党の悲劇』というほかはない。修正案をもって国会で闘う道がまだ開かれているが、社会党はそれもしようとしないと非難した」（要約）。だが、何もしないと断言するのは言いすぎである。また、GHQのニュー・ディール派と正面衝突することの是非について、何もふれていない。

そこで、予算問題に対する社会党、左派の対応をみることにしよう。GHQとの交渉過程については、遺憾ながら大蔵省の『渡辺日記』によらざるをえない。

片山内閣の辞任でGHQはかなり神経質になったようである。『渡辺日記』「六月十四日」は、「司令部として政治に関与し度くないとの立場は諒解するも経済問題と政治問題は切り離すことはできない」とリードを説得している。マックの命令と称して片山内閣を潰したリードに、大蔵省が介入するよう促した事実は見逃せない。しかも、自己の無能は少しも恥とせず、GHQが進んで予算問題の解決に乗り出すことを求め、「予算を放っておくならば、経済スタッフが日本に止まる意味はない」とまで極言し、財政課を説得した。予算案の作成もできないような大蔵省は不要であり、自分たちが辞めるのが筋だろう。ところが逆に経済スタッフの責任を追及し、介入を求めた。官僚政治を責めても「蛙の面に何とやら」、怒るだけ空しい。

「同一五日」には、「ファイン、アルバー、リード、ハッチソンの会合に参加」、予算に司令部が関心をもつことは差し支えないではないかと説得し「司令部も動く気配あり。ただ方法その他に付て用心深き態度なり」と記した。「同一八日」には「マーカット、ファイン及コーエンに面会」、予算成立促進に動くのは今だと説得した。ようやくマーカットがマッカーサーに会うことになる、と記した。これらの記述は、逆に、片山内閣の崩壊をいかにマックらが悔やんでいたかを裏書きするもので興味深い。なお、主語はすべて「余」だが、片山内閣の時は池田なども「余」であり、渡辺だけだったとは思われない。

社会党政調会編『昭和廿三年度予算案と我党の修正経過』と題するパンフレットは、政府案は鉄道運賃を貨客とも3.5倍、通信料金を4倍とし、官公吏の賃金を3791円とするものである。これに対して、社会党は不当増加財産税などを財源とするA案を作成した。しかし、この案をGHQは絶対に認めないことは明らかであり、固執すれば国会は空転し、労働者の賃金は2920円に据え置かれる。そこで島田、木村、松原喜之次、勝間田（和田、佐多忠隆らとともに安本組は社会党へ入党）がA案とともに、貨物3.5倍、旅客2倍、通勤定期1.5倍、通学定期すえおきのB案を作成した、という。

しかし、『日記』「同二日」は、与党三派がB案を中心に協議したがまとまらなかった。「同二三日」はマーカット、ファイン、コーエン、リードが三派代表（社会党は勝間田、松原）と会見し、マーカットは終戦処理費の削減を求めた社会党案に対して、日本にその権限がないと述べ、予算編成五原則を文書で渡し、予算審議を促進するよう要望した。その後、別室でファインらが三党修正案は現実的ではない、午後具体案を提出せよと述べたが、明朝に改められた。「同四日」勝間田よりさらに一日延期を要望、ファインは自力による国務運営能力を世界が注視、このような政争の

繰返しでは対日援助も困難となる、午後回答せよと申し渡す。午後、西尾不信任案国会へ上程され、回答されず。「同二五日」司令部と三党政調会長（稲垣、鈴木及び浅沼、米窪、竹山裕太郎）会談。ファインは妥協案を提出、各党は持ちかえる。「同二六日」鈴木は単独でファイン、コーエン、リードと会見、妥協できないと回答。また、賃金水準もすぐ上げることになると述べ、ファインは予算ができないのにそれをぶちこわす発言は困ると反論し、夜会談を再開することになる。入れ替わりマーカット・芦田会談。夜、三派とファイン会見。ファインはしきりに旅客運賃2.85倍でまとめようと努力するも鈴木は承知せず、会合の延期を主張、ファインは憤然として「妥結を欲せざる人が居る以上これ以上話しても無益なり」と会合を終わる。

「同二八日」ファイン、リードと会って現状報告、「覚書」をだそうかという話を聞く。夕刻、北村蔵相、栗栖安本長官が苦米地（官房長官）妥協案を中心に各党が協議中と報告、マーカットは両大臣がよければ結構と答える。「同二九日」妥協案を民、国は呑んだが、社は2.5倍を主張して譲らず。マーカット、ファイン、コーエンと4人で協議（残る一人は渡辺か、より上級者かは不明）、司令部が乗り出すことになる。マーカットはファインに命じて一定期間内に予算審議を完了せしめるよう「日本側に命ずる覚書発出の準備を命ず」。その後マーカットは「今朝の案をold man（マック）にわたしてきた」、ホイットニーにもサインして貰った方がよいと考えている、と述べた。社には2倍を主張する者もあり、民は官房長官案より妥協できないと、完全にデッド・ロック。午後ケーディス、ウィリアムズは松岡議長を尋ね、明日中に通過させねば重大な結果を招くと述べた。ウィリアムズは鈴木、稲垣を招き妥協を勧めたが、稲垣はこれ以上妥協できないと拒否。ケーディス・松岡会談の示唆により、夜三党首会談が開かれたがまとまらず。ファインは官房長官案に少し色をつけた妥協案を出し、これをマーカットの決定として三党首に示すことになった。「同三〇日」「余」はファインに妥協案を出せば蔵相が辞めるなど民主党が分裂し、社会党からも2倍論者は脱党する。この際、政府原案に戻った方がよいと主張。ファインは、マーカットに言われて妥協案を作ったが、マーカットが日本の政治家の面子を保つ為に妥協案を認めるのは嫌だと言いだした。そこでファインと共に民政局へ。同局で三党首会談、鉄道運賃2.55倍などの妥協案で三党合意、危機は一応回避。

以上、かなり長文を引用した。大蔵官僚は三党の調整に力をそそぐよりも、GHQを動かすことに熱心であったこと。特に、大蔵省に近い案を「マーカット覚書」（要望として実現、ついで命令とすることに努力）という形でおし通そうとした姿勢には、あきれざるをえない。なお、社会党の前記資料には、六月二八日に「マーカット將軍メモランダム」が突然官房長官から各党政調会に配付された。「予算の早急通過。財政均衡の五大原則の維持、対日援助の前提は財政の均衡を要求する。党利党略でアメリカの援助の時期を逸するべきではない。占領以来日本は最大の危機にあり、これはマッカーサー元帥及び自分の強い意志である」、これがメモの要点である。なお、社会党の『経過』には鉄道運賃2倍、学生据え置き、社会党案が三党一致で認められ、それに対して「メモ」が出されたとある。その過程などは『日記』に記されていない。その他、社会党の資料と『日記』の記述と食い違う点も少なくない。大蔵省が「国民」の為によりよい案を考えれば、「敗戦後最大の危機」は来なかった筈である。党利党略を責めるよりも、大蔵省が面子にこだわりすぎた点を「余」は反省すべきであった。

23年度予算を審議する衆議院予算委員会が7月2日に開かれ、左派の黒田ら3人が反対にまわり、予算案は一票差で否決された。翌3日の衆議院本会議で予算案が成立したが、黒田、荒畑、岡田春夫ら12名は青票（反対票）を投じ、荒畑は同時に離党した。参議院においても、木村、堀真琴らが青票を投じ、松本治一郎らは棄権した。

黒田さんに晩年お目にかかった時、「大体、鈴木君がムチャだった。運賃値上げに前は反対し、今度は賛成しろと言う」と通称「黒田のお殿様」はまだ怒っていた。拒否すれば労働者の低賃金が改善されないこと、GHQの経済科学局だけではなく民政局まで敵にまわし、「命令」により予算案が成立することを全く考慮していなかった。GHQは国会解散まで考えていたようである、と鈴木から聞いた覚えがある。結果論としていえば、断固反対した方が社会党には良かったかも知れない。だが、無責任のそしりを免れない。そもそも左派が主張したように最初から連立内閣に参加せず、野党に止まれば良かった。鈴木は、予算委員長として予算の審議過程の内容を議会で報告し、最後に、3,700円ベースは極めて近い将来に臨時国会を開催して対策を講じたい。これまでのインフレ予算に最後の終止符を打たねばならない。予算の編成に国会はなんら関与せず、GHQと政府の協議により主として主計局が編成し、政府はGHQの権威にかくれて国会の審議を無視する嫌いがあると、個人的見解を述べた。これが精一杯の抵抗だった。

西尾問題といわゆる青票問題の波紋は大きく、西尾は2日に副総理の地位を去った。7日に中執は、西尾の除名を決定し、同時にまた、黒田ら6人の除名、木村、堀ら10名の役員権停止を決めた。鈴木が先頭になって木村らの除名を主張したという著書もあるが、誤りである。その時、近い将来に黒田や木村らが復党できるように努力したい、と語っていた（広沢氏談、氏は晩年木村経済研究所の役員を勤めた）。荒畑を除く青票団は正統派議員団を結成し、その後労働者農民党を結成した。同党の結成は意に反して共産党からも批判され、首席の黒田は、共産党に利用されて裏切られたと激怒し、立会演説会において共産党は不倶戴天の敵と非難した。木村も広沢に労農党に対する不満を述べた。鈴木は、運動の将来を展望し、広沢らに黒田や木村らを攻撃しないよう注意した（広沢氏談）。同党は、後に統一社会党と合同するが、すべてが同じ行動をとったわけではない。54年6月26、7日の『中央委員会議案』に堀らと2回会談した記録が掲載されている。堀は「第三勢力、中立政策は分裂主義である。左右社会党の合同は労農党を入れず分裂主義である」と質問に答えた。「平和四原則」を否定するようでは社会党と一致しない。

10月7日、芦田内閣総辞職。前述の如く、山崎首班工作の失敗後、民自党単独の第二次吉田内閣が8月1日の第49号が最後となった。機関誌『社会主義』の刊行は布施が編集にあたり、49年1月号で終わった。布施は「何となく研究所生活が空しくなり」、1月の総選挙から労農党公認で片山の選挙区から立候補し、ともに落選した。広沢氏などはその選挙運動に奔走し、鈴木にこっぴどく叱られた。研究所には清水女史（後に総評勤務）ただ一人しかいなかった。選挙後、布施はケロッとして顔をだし、今後どうするかと鈴木に聞かれ、高本、とともに金融関係の研究所をやっていくと答えた。研究所はここに歴史的役割を果たし、解散することになった。

（すずき・てつぞう）